

この子らと

令和3年2月

まことの保育



ちゅうりっぷの息吹

鹿児島竜谷学園和光幼稚園



園長 川口公男



光の春→音の春→気温の春

2月4日は、「立春」

春は、「光の春」「音の春」「気温の春」と順番にやってくるそうです。

「光の春」という言葉はロシア「旧ソビエト」で始まったと言われております。ロシアは、冬は暗く陰鬱で長く続きます。春とは言え気温は低いため、人々は太陽の明るさで春を感じるということです。



ふきのとう



ほとけのざ

「音の春」は、雪の多い地方では雪解けの音、鳥の鳴き声などいずれも春の到来を告げる音「音の春」と言えます。

そして、3月の春分の日(彼岸の中日)を過ぎる頃は「暑さ、寒さも彼岸まで」のとおり、気温も上がり甲突川等のソメイヨシノ(桜)も咲いて、春本番となります。光の春とか音の春とか感性豊かな表現だと思えます。

ソニーの創業者井深大の著書「あと半分の教育」では、知的学力を偏重して、心を置き去りにした日本人を憂えて、人間力を高めるためには、心や感性を重視した「あと半分の教育」を今こそ進める必要があると示唆しています。

本園でも幼児期にふさわしい教育として、感性や、



思いやりの心、道徳的判断力、考える力等を育む「あと半分の教育」を進めております。

「雪が溶けると何になりますか」という問いに「水になります」と科学的に答える教

育と「春になります。」と五感を働かせて答える教育とのバランスのとりながら教育を進めることが、未来を担う子どもたちに生きる力を培うと思っております。

コロナ禍の音楽発表会



練習 年少少組



補助舞台運転手作成

子どもたちは、リハーサル、本番に向けて練習に精出しています。「下を向いたら虹を見つけることはできないよ」の言葉どおり、自らの可能性を信じて、職員とともに一生懸命です。2月7日の本番では、最善を尽くして感動をプレゼントしてくれると思います。乞うご期待!

請求書

朝、掃除をしていると、息子の裕くんの机の上に二つ折りした紙を見つけました。

開いてみると、息子の裕君の字で次のように書いてありました。『請求書・・・お使いに行き賃100円、庭の掃き賃200円、妹のおもひ賃250円、合計550円』

お母さんへ 裕より

お母さんは、裕くんの机の上に550円と一枚の紙を置きました。『請求書・・・風邪の看病代 ただ、食事の世話代 ただ、お洗濯代 ただ、合計 ただ』

裕くんへ お母さんより

これを読んだ裕くんは、胸がいっぱいになり、今にもこぼれ落ちそうな涙をおさえて決心しました。お金はいらない。大好きなお母さんのためにできることなら何でもしよう。

口にくわえたペンで血をにじませながら書いた詩画集「鈴の鳴る道」から 亡き母を思う 星野富弘

誰がほめようと 誰がけなそうと どうでもよいのです 畑から帰ってきた母が できあがった私の絵を見て 「へえっ」と一声驚いてくれたらそれでもう十分なのです。

--	--